

概 要 報 告

実施期日	8月5日(月)
部 会 名	小学校 外国語活動・外国語部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『誰とでもコミュニケーションを取ろうとする子を目指した授業づくり ～学年の積み上げを意識した授業展開～』

提案概要

当該学校の小学校6年生を対象に外国語活動におけるアンケートを実施した。このアンケートの結果から、「話すこと」への苦手意識の軽減と、目的・場面・状況にあわせて活用できる既習表現の定着という2つの課題が浮き彫りになった。暗記したものをただ暗唱するような活動ではなく、言葉に詰まっても考えながら自分たちの想いを伝え合えるようになってほしいという教師の願いから、本実践を行った。また、「話すこと」においては、外国語の5つの領域に偏りが出ないように配慮し、通年で以下の5つの手立てを考慮しながら取り組んでいる。

【話すことへの苦手意識の軽減】

- ① 「聞きたい」・「話したい」という思いが膨らむ言語活動。
- ② 個別最適な学習と、協働的な学習

【目的・場面・状況に合わせて活用できる既習表現の定着】

- ③ 既習表現の活用
- ④ トークマップでのやり取り・発表
- ⑤ スモールトークの充実

本実践事例、東京書籍 Unit6 「Let's think about our food.」は、食材を通じて日本と世界のつながりを知り、食べ物の産地や栄養素について簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分のおすすめする料理を紹介することを目標としている。先述のような児童の課題を改善するために、教員が関連教材やこれまでの既習事項等の表現を予めしっかりと確認してから、「その場で」のやり取りに焦点を当てながら授業を行った。前時までの学習では、買い物の疑似体験をするインタビュー活動の場面を設定し、電子マネーの普及に伴い、POYPOYという架空の電子マネーを使って、児童の実生活になるべく近づけるように工夫をした。ただし、小学校の段階では文法事項は指導しないこととなっているが、ここでどうしても単数と複数扱いの名詞を区別する必要があった。そこで、他の教員と協議を重ね、教員側で色分けをして児童に提示することで、isとareの使い分け方を示すこととした。

本時では、当日の給食のメニューの画像を映し出し、「Where is シラス from?」「シラス is from Fujisawa.」の表現を導入で用い、次第に複数形を取り入れながら進めていった。児童にとって親しみやすいように、話題の順番を、まずは、全員が経験した給食から、今日の朝食、そして昨日の夕食といったようにスモールステップを踏みながら提示した。教員側と児童とでスモールトークで使う表現を確認・定着した後、「手に入れた食材から、自分のよく食べる好きなメニューを紹介しよう」というめあてで、メインの活動へと入った。藤沢市の栄養素に関するキャラクターも導入し、視覚的に何を問われているのかが即座に分かるように配慮した。

活動においては、どの児童も楽しく、活発に活動し、表現方法が全く分からないという様子は見られなかったが、言い慣れた表現であっても、実際に受け答えするとなると、なかなか言葉が出ない様子が見られた。また、教員側の問いかけに即座に答える児童は多くなく、文字を見ながらゆっくりと考えながら話すことが多かったように感じている。ふりかえりでも、「まだ、難しい。」や「栄養グループと生産地とが混ざってしまった。」と書いていた児童もいた。ただ、「What would you like?」の表現を使った全体での共有の際に、「Do you sometimes eat ネギトロパン?」と問い返した際に、即座に「No, usually.」と単語レベルではあるが、その場でのやり取りができるようになっており、これまでの学習の積み重ねを感じることができた。また、グループ活動における評価に関しては、学習支援アプリ（ロイロノート）

の録音機能を活用しているが、英語がそれほど得意な児童でなくても、自分なりの表現で文章をつけ足したり、気持ちのこもった表現をしたりする様子も見受けられた。

質疑応答

Q：複数形と単数形のカードを色分けされていたということですが、児童から「これは何でこっちの色で、2色あるの」という質問が出たのか？

A：単数形と複数形の使い分けを知っておくことは、中学校との連携を考える上でも必要。動物たちの単元があるが、小学校中学年から概念として入っているものである。また、グループとして児童もsが付くことに気づいている。

Q：学年の積み上げを意識したということだが、5年生までにどれぐらいの力が必要なのか？

A：学年によって変わってくるが、「何それ？」とならなければよいと思う。去年やったことなどを思い出して、「あー、それね！！」と思い起こせるようになっていけばよい。たくさん話せるというよりも聞いたら意味が分かるころまでなっていればいいのではないか。

協議の柱及び協議概要

協議の柱「考えながら伝え合う力の育成」

(一部抜粋)

○考えながら「その場で」「即興で」話すというのは、そうした機会をたくさん作ることに、何度も反復してやっていくことが鍵になるのではないか。トピックに対して考えをもつことがすごく難しい児童が多いという印象があるので、外国語の授業だけでなく、全教科で自分の考えを表現することを大切にしていきたい。また、お互いの関係がいいと、伝え合う姿勢が活発になったという経験があるので、そうしたクラスの人間関係を築いていくことが大切になるのではないか。

○お題の設定、目的、場面、状況のような、テーマによって話せたり、話せなかったりが児童によってあるので、テーマが大事になってくるのではないか。また、アウトプットも繰り返し練習していないとできないので、日々やっていくことが大切だと感じた。ただ、小学校では慣れ親しむことが目的だが、中学校では受験もあるので学習内容を終わらせる必要があり大変なので課題はあるように感じた。

○地域によって変わってくるが、鎌倉は英語サポーターという形で3・4年生を中心に配属されている。そのサポーターの先生や専科の先生のやり方次第で、児童のやる気に関わってきたり、雰囲気が変わってきたりする。反省のようになってしまいが、そもそもクラスの雰囲気づくりができていないと、外国語のアクティビティにはつながってはいかないと思う。なので、他教科でも、いつでもアクティビティができるというようなクラスをつくっていかねばならないと感じた。また、外国語の指導だけでは難しく、他の教科でもそれを支えていく必要があるとも感じた。

まとめ概要

成果と課題に関しては、やはり、新出表現での「その場」での表現は、小学生にとっては難しかったようである。特に本時の場面では、英語での表現が分からずに、日本語で表現することが多くなってしまっていたので、英語を使う時と日本語でもよい時とのメリハリをつけると、もう少し授業がうまくいったように思う。また、活動自体は楽しく、どの児童にとっても興味深いもの、実際のやり取りにおいては有効的ではあったが、それが故に正確さが欠けてしまうことがあったので、楽しさと正確さのバランスをとっていくことが必要であると感じた。実践後のアンケートからは、児童がより自信をもって、「話すこと」に取り組むことができるようになったことが伺えた。そして、児童はもっと自分を表現したいという思いをもっている。それに伴い、さらに外国語文化への理解や英語を使用したいという思いも強まってきていることが見て取れた。

その場で、誰とでもコミュニケーションを取ろうとする態度を育成するには、学習の積み重ねが欠かせない。結果を焦ることなく、児童が間違えてもよいので何度も繰り返し繰り返し使っていくことが必要ではないかと考えている。そのためには、学年の専科だけではなく、外国語を担当する教員同士で思いを共有していくことが大切だと感じている。